

## 研究者のための+ $\alpha$ シリーズ Vol.12

### Create Your New World!—専門研究から融合研究を開拓する—

(2022年3月30日(水) 16:00~18:00 開催)

#### 【Q&A集】

#### ○事前にいただいたご質問に対する回答

【Q1】 How to start a joint collaboration with a famous professor? 【准教授・講師相当の方より】

【A1】

- **矢野先生**：大学の先生であればメールアドレスを公開しているはずですから、とにかくメールを送ってみましょう。その際、自分の提案が、先方にも意味があって興味を感じてもらえるようなメールを書くことを心がけましょう。私は若い頃、海外の学会参加の際には、訪問先を2、3つ見つけてこいと指導されてきましたので、飛び込みには慣れているかもしれませんが、試行錯誤も大事です。

【Q2】 異分野融合研究のための研究ネットワークの広げ方を知りたいです。特に日本国内でなく、世界の研究者とのネットワークの拡大方法を教えて頂けないでしょうか。【准教授・講師相当の方より】

【A2】

- **矢野先生**：ほとんどメールです。相手にもよりますが、メールでアポを取り学会で会食するという流れでしょうか。相手と会話する際に私が大切にしているのは、人間関係を築くためには、安易に会話を終わらせてはいけないということです。自分自身の大きな仮説を念頭において相手の話に耳を傾け、相手の言葉に関連した自分の意見、問題意識、やりたいこと等を、誠実に投げかけるよう心がけています。I see.と言って納得してしまっただけでは、会話が終わってしまいます。英語が聞き取れなくても気後れせず、会話を続けるよう心がけています。コロナ禍のこの数年は、国内メインに活動を展開していましたが、オンライン化されたことで、海外交流はやりやすくなったと感じています。紹介で知り合った初対面の方であれば、対面より多少関係は薄いかもしれませんが。

【Q3】大学院生とゆっくりと話し合う時間が限られ、常に焦りつつらさを感じています。研究時間確保のための時間管理、限られた時間で成果をあげるための、具体的なプロジェクトマネジメント方法を教えて頂けないでしょうか。また、情報収集相手の見つけ方、信頼関係の構築・継続、研究資金獲得・支援者を集める方法、Minority へのバイアスを覆す方法についても、お考えをお聞かせください。【教授相当の方より】

【A3】

- **矢野先生**：講演で紹介したとおり、研究室が生産的であるためには、FINE<sup>(※1)</sup>な関係、学生と教授が信頼できる関係を作ることが大切です。研究室は教授と学生という序列の組織であり、上下関係だけになりがちですから、弱いながらも横、斜めの関係を作ることが重要と思います。研究室の場づくりは教授にしかできませんから、ぜひ検討してみてください。外部資金獲得・支援者を集めるには、外のつながりが重要です。私自身の経験で言いますと、一般向けの本を出版することをお勧めします。ネットワーキングを広めるという点に関して非常にインパクトのある活動といえます。それまでつながっていなかった人達とのネットワークが増幅していったことに大変驚きました。
- **安浦 PD**：私自身がラボを運営していた時には、教授室と学生部屋が隣同士で繋がっていたため、ドアを常に開けたままにしていました。こうすると学生部屋の様子もよくわかりますし、賑やかな時には、私から様子を見に行ったりもしていました。また学生も、気軽に教授室に入ってきました。研究室が一体化できますし、学生の個性もよくわかります。

(※1)矢野和男 (2021) 『予測不能の時代：データが明かす新たな生き方、企業、そして幸せ』草思社。

【Q4】昨今「専門研究から融合研究」と言われますが、何をもって「融合研究」とお考えになるでしょうか。専門分野は細分化されており、なんでも「融合研究」と言えますし、人によって、その粒度も異なっていると思います。【URAの方より】

【A4】

- **矢野先生**：研究分野とは固定化するものです。なぜなら人は一人で何もできませんし、さらに歳をとれば分野を変えにくくなり、その先生がいなくなるまで分野は固定化されるからです。しかし、社会はそれ以上のスピードで変わっているため、社会にとって必要な研究、やるべき研究であるのに、単に過去からの連続性のために空白地帯になっている分野ができます。それが今やるべき「融合研究」と考えています。その領域を見極め

るために、私が大切にしているのは、人とのつながり、そして読書です。  
特にピーター・ドラッカーの著書をお勧めします。

**【Q5】** 大学組織において、異分野連携研究はどう評価されているでしょうか。また専門分野を突き詰める研究者と、分野間の境界領域を開拓する研究者を比べた時に、アカデミアのポスト獲得競争において、有利/不利があるでしょうか。個人的には、大学教員公募においては、特定の専門分野における研究能力・業績がプライオリティであり、その専門知を他の研究分野に展開していく能力は最重要ではないと思います。その場合、異分野連携研究に取り組むこと自体が、ポスト獲得競争に不利に働くことを危惧しています。**【助教相当の方より】**

**【A5】**

- ▶ **矢野先生：**アカデミアのポスト獲得における有利不利はわかりませんが、それだけで研究をするかどうかを決めるのは、いかがなものかと思います。私は世の中にあるべき研究、大事なことなのに十分研究されていない領域への好奇心や興味、研究者としての使命感、研究領域の新大陸を見つけられるかもしれない、社会において重要な発見ができるかもしれないという気持ちを持って、研究をしてきました。人事的な評価は結果としてついてきたものです。有利か不利か、評価の目線で研究テーマを選んでも、そのテーマは当たらないのじゃないかとも思います。講演でも触れましたが、日々前向きな気持ちで、新しい知見や情報を取り入れ、新たな気づきを得て、自分の計画をアップデートさせ、当初予定していなかったところにつながっていくのが、楽しいのではないのでしょうか。
- ▶ **安浦 PD：**大学教員の公募の現状は、ダイナミックに変わってきています。既存の大学の研究分野の後継者だけでなく、新分野を開拓するような研究者の公募も、海外では多く行われていますし、国内でも増えてきています。

## ○当日の Q&A 時にいただいたご質問

**【Q6】** ご講演を聞き、他分野との融合や斬新な研究の推進は、結局のところ本人のセンスと信念・ガッツが重要と感じました。信念・ガッツのような精神的な要素は、ご講演でお話いただいたように、物事との向き合い方で変えられると思う一方で、センスは物事との向き合い方だけではどうにもならない気がします。そのあたり先生の率直なお考えをお聞きしたいです。

**【A6】**

- ▶ **矢野先生：**講演中も紹介しましたが、練習すれば誰でも、常に前向きに困難に向き合い、立ち向かうことができるようになると、Fred Luthans 教授

らは、『心の資本』<sup>(※2)</sup>で提唱しています。彼らは膨大なデータ解析に基づいて、従来の精神論とは違い、そのことを明確に証明しています。センスについては、私は人にはそれぞれ置かれた環境や経験に基づいた多様性があり、次元の尺度で比べることは無意味と考えます。その人なりの新たな道を拓いていくことが大切であり、その人なりの価値の出し方があるはずです。その意味で、センスは「個性」と捉えて、それを大事にして欲しいです。

(※2) (日本語訳) フレッド・ルーサンス他 (2020) 『心の資本』中央経済社、(原著) Fred Luthans, Carolyn M. Youssef-morgan, & Bruce J. Avolio (2015) “Psychological Capital and Beyond,” Oxford University Press.

**【Q7】 キャリア形成の観点から、研究領域を変え、新たな分野でも成功するためのポイントは、何だと思われますか。**

**【A7】**

- **矢野先生：**私は色々な人に会うことが大事だと思っています。自分の道を振り返った時に、大事な場面で色々な人から大事な導きをもらっているからです。一つエピソードを紹介すると、私は加速度センサを用いて人間の体の動きを測定するテーマに早くから取り組んできました。当時、その重要性はまだ認められておらず、純粋工学的にもそれほど価値のある研究と考えてはいませんでした。しかし、歩く、走るといった人の行動を認識できる可能性がある点に価値があると考えていました。しかし、この研究の価値はそれだけではなく、人の無意識の振る舞いや環境への反応を観察できるツールである点だと考えるようになったのは、MIT の Sandy Pentland 先生との出会いがきっかけです。先生は、社会や組織のコミュニケーションは、一見高度な言語コミュニケーションで成り立っているように見えて、実は大部分、声のトーンや体の動きといった非言語コミュニケーションで成立しているという考えをお持ちで、その議論には大きな影響を受けました。もう一点、私は偶然の出会いや直感を大切にしています。実は、Pentland 先生との出会いは、MIT から送られてきた研究紹介の冊子でした。全体に目を通すなかで、直感的に、Pentland 先生の研究の面白さ、可能性を感じたのです。そこで私から、我々がもつ人間や組織のデータとセンサを活用し、Pentland 先生や他の先生を巻き込んで、人間情報を分析し、良い組織を作り上げていくために共同研究をしませんかと提案したのです。当時、人間活動や組織をデータとして扱うのは最先端の研究テーマ

でした。この共同研究をきっかけに、さらに多くの出会いに恵まれました。他にも研究を通して、これまで様々な出会いがありました。相手が高名な先生であっても、あなたから積極的にメールを送ってみてください。意外と気さくに会ってくれるものです。返事が来ないこともあります。それはあなたの所属や業績が理由とは限りませんから、どうぞ気楽にチャレンジしてください。コンタクトを取れた時には、自分の研究や提案に関心を持ってもらえるよう、常に相手にとっても利のある、面白い提案をするように心がけています。そしてその出会いを大切にしたいです。

**【Q8】 矢野先生が、ご自身の工学系の研究に「人間性」を組み込むにあたって、重要視された点は何ですか。**

**【A8】**

- **矢野先生：**自分の専門分野だけを考えると視野が狭くなりがちですので、色々な分野に自分の研究ネットワークを広げ、視野を広く持つことが大事です。分野が違えば、見方も違うものです。私は集めたデータを心理学や経営学、人間行動といった広い分野の研究者に提供し、活用してもらいました。その時に、同じデータであっても、研究者によって、例えば、個人の心理学、社会心理、経営学的な観点、メンタルヘルスと、全く違う関心を持つことを知りました。また、その分析手法も全く異なることを目の当たりにしました。